

第73回 (2012年度)

私立大学図書館協会総会・研究大会参加報告

加藤博之

私は8月30日、31日の2日間にわたり、第73回(2012年度)私立大学図書館協会総会・研究大会に参加する機会を得た。以下はその参加報告である。

1. 当総会・研究大会について

当総会・研究大会は200校以上の私立大学から図書館長および図書館管理職者等が参加する大会合である。本年度は、慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された。なお、当大会は毎回テーマが設定されており、この第73回大会のテーマは「個性化の戦略—創造する大学図書館—」であった。

初日は私立大学図書館協会の総会および記念講演があり、その後、場所をグランドプリンスホテル高輪に移して意見交換会が行われた。総会では、私立大学図書館協会の2011年度からこの総会に至るまでの私立大学図書館協会の活動内容等の報告があった。総会当日に配布された総会資料の式次第に目を通すと総会では、1. 協会賞(2011年度審査決定・2012年度表彰)、2. 研究助成決定報告、3. 協会会務報告、4. 委員会報告、5. 協会関連事項報告等々と様々な報告がなされている。これらの報告内容はこの総会資料に詳細に記されているので、この資料を読むだけでもこの1年間の私立大学図書館協会の活動や他大学の図書館員の活躍の様子を伺い知ることができる。こういったことは、日々の業務の中では目に留まりにくいことであるので、この総会資料は図書館界の活動を俯瞰して見ることのできる有益な資料であろう。

2日目は、研究大会が行われ海外集合研修報告、研究助成発表、国際教養大学中嶋嶺雄学長の講演と続き最後に聖徳大学、明海大学、和光大学の各図書館職員の事例報告があった。

本稿では、その全てを報告することはできないが、これらのプログラムの中の海外集合研修報告および国際教養大学中嶋嶺雄学長の講演について後で報告

したいと考えている。

今振り返って思うに、当大会は昨今の大学および大学図書館を取り巻く厳しい社会情勢を受けて、なごやかな雰囲気の中にも大学図書館の現状を改めて聴講者に問いかける話もあり、身が引き締まるものであった。また、様々な課題をかかえる大学図書館の業務改善のきっかけとなりえる先進的事例の報告もあり有意義なものであった。

2. 開会式

初日の開会式について触れる。開会式で聴くスピーチにはたいてい講演者の訴えたいことがコンパクトにまとめられていて学ぶべきところが多く、私はこういった会合に参加する時は個人的に開会式のスピーチをいつも楽しみにしている。時には開会式のスピーチの内容が、参加したセミナーや研究大会において最も印象深く最後まで記憶に残る内容だったということもある。当大会の開会式のスピーチでもそのような話を拝聴することができた。特に印象深く感じ、私がメモを取った内容を以下に紹介する。

(1) 慶應義塾大学メディアセンター 田村俊作所長

“(当大会のテーマである「個性化の戦略」について触れて) 図書も電子も来館者も非来館者も図書館がサポートするという境界があいまいになった時代だからこそ、各図書館が自らの強みを確立し個性化することが重要と思われる。”

(2) 立教大学図書館 石川巧図書館長

“電子化、資料デジタル化、ラーニングコモンズ、学習アドバイザーといった図書館の最近のサービスは「やさしく、丁寧、至れり尽くせり」だが私は違和感を覚えている。プレーキも必要なのではないか? 図書館は知性を獲得することの困難さや、知性を得たその先のものを授ける必要もあるのではと思う。

図書館の現状は、連帯ではなく横並びになってい

ないだろうか？予算不足、人材不足を理由に内向きになってはいけないと思う。不足していること、足りないことはバネになるはずである。慶應義塾大学を創立した福沢諭吉が学んだ塾では、塾生にたまたみ1畳しか与えられなかったが、そこから近代の礎が生まれた。私はこの2日間で足りないことは何かを考え抜きたいと思う。”

(3) 文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室 長澤公洋室長

“図書館の機能の見直しが必要と思われる。それは学生が能動的に学習する環境を整えることである。図書館に行っても学習スペースがない、図書館が老朽化していて学生の足が離れる、といったことではいけない。ラーニングコモンズの整備が進んでいる大学図書館を訪問しているが、ラーニングコモンズを進めている図書館は、学生も図書館も活気がある。学生が一日中図書館にいても飽きない図書館を構築することが重要かと思われる。

また、7月に学術部門分科会の報告書をまとめた。日本の情報発信力は脆弱であるという結論に達し、日本のジャーナルの強化を掲げている。中でも機関リポジトリの強化を挙げているが、現在はリポジトリというには内容がともなっていない状態であるので、強化していただきたいと考えている。様々なチャンネルで、大学図書館の魅力をアピールすることが重要と考えられる。海外の研究者が、日本に来たいと思うような状態にしていけないといけない。”

(4) 国立情報学研究所 安達淳副所長

“大学の発信力強化として、機関リポジトリが極めて重要と認識している。ジャイロクラウドという機関リポジトリの構築のためのサービスを開始し、50以上の私大から申し込みがあった。”

3. 研究大会への参加にあたって

この研修に参加するにあたり、私は聴講を楽しみにしていたプログラムが2つあった。1つは2011年度海外集合研修報告・2011年度海外派遣研修報告、もう1つは中嶋嶺雄・国際教養大学学長による講演「国際教養大学の挑戦と図書館」であった。

これらのプログラムを楽しみにしていたのは、この2つの報告・講演の中には、大学図書館の将来像を描くためのヒントがあると考えていたからである。

当研究大会が開催される数日前に、中央教育審議会が「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」という答申を発表した。この答申は新聞等のメディアでも大きく取り上げられたが、「大学は学生の学習時間の実質的な増加・確保を」というのがその趣旨だったと記憶している。

全入時代を迎えて学生の質の低下が懸念されているが、その一方で、グローバル化に対応できる能力をもった人材の育成が急務であると、社会・経済界から要請されている。そうした中で、学生が授業時間以外で主体的に学ぶ仕組み作りを進める大学に、重点的に財政支援を行うという方針が打ち出された。

この中で、文科省が私学補助金を重点的に分配する1つの目安として、大学図書館の24時間開館やラーニングコモンズの設置が挙げられていたことはまだ記憶に新しい。

大学図書館は文科省が求める大学改革の1つの目安とされ、難しい課題をつきつけられたわけであるが、上述の2つのプログラムはその実践例の話であると言える。前者では、中央教育審議会がモデルとしていると思われるアメリカの先進的図書館の調査報告を聞くことができると期待し、後者では、図書館の24時間開館を実践している大学の実態を知ることができると期待した。以下はその2つのプログラムの報告である。

4. 「国際教養大学の挑戦と図書館」(中嶋嶺雄・国際教養大学学長)

講演の内容は講演者の著書である「なぜ、国際教養大学で人材は育つのか」をコンパクトにしたようなものであったが、講演を聴いて改めて中嶋先生の教育にかける志と熱意に強い印象を受けた。

国際教養大学は開校して間もない大学であるが、同大学の卒業生はグローバル社会で活躍できる能力を身に付けた人材であるという高い社会的評価を受けている。

その根拠となるのは、同校の非常に厳しいカリキュラムと学生の学習時間の長さにあるということができそうである。講演で聞いた例をあげると、たとえば、入学生は最初に英語の特別プログラムを履修するが、大学が求めるTOEFLの非常に高いスコアを越えない限り一般教養の科目の履修に進むことができない。また、普段の講義はすべて英語で進めら

れ、アメリカの大学のように、翌日までに7冊もの英語文献を読まなければこなせないような課題が出されるとのことであった。

そういったハードなカリキュラムをこなすために国際教養大学は、図書館を非常に重要視しており、それが図書館の24時間開館につながっているようであった。上述の授業について行くためには国際教養大学の学生は昼夜を問わず学習する必要がある。またハードな課題をこなすためにはレファレンス教育が欠かせないという認識が大学側にあるので、図書館情報調査研究序論という講義が初年度の必須科目とされているとのことであった。このことから図書館が重要視されていることがわかった。

同大学が図書館をこのように重要視している理由には中島先生ご自身がオーストラリア国立大学やカリフォルニア大学サンディエゴ校での客員教授時代に図書館に助けられ、図書館の重要性の認識を深めたというご経験がもとになっているとのことであった。

図書館の24時間開館の現実化にあたっては秋田県知事の反対にあったとのことであった。しかし中島先生自らが直談判に赴き知事からの了解をとりつけたというエピソードを聞き中島先生の教育にかけるとの思いの強さを感じた。

3で述べたとおり、文部科学省は私学補助金の配分において大学の改革度を評価する項目の1つとして図書館の24時間・土日開館を上げているが、今回の講演を聞いていると図書館の24時間開館を実施している私立大学を「改革派」と見る文科省の考えは、手段を目的と取り違えた政策ではないかと思えた。大学の改革度は24時間開館でもって計られるのではなく、国際教養大学にあるような、学生の「学習への切実な思い」を涵養することが実質的な教育の質の向上であると思われる。中島先生の講演を聴く中で、学生の必要性を考慮せずに図書館を24時間開館とするのではなく、先進的事例に学びながら、各大学の教育改革の進捗度に合わせて必要なサービスを展開するのが合理的だと感じた。その先に24時間開館は必要とされるのではないだろうか？

では、図書館が提供すべき必要なサービスとはどのようなものになるのか？それを次の5で紹介したいと思う。

5. 2011年度海外集合研修報告・2011年度海外派遣研修報告

このプログラムは私立大学図書館協会の標記研修に参加した私立大学の図書館員がその研修内容を報告するものである。

今年度の参加者はみな研修先をアメリカの大学図書館としていたため、多数のアメリカの大学図書館の先進的事例を窺い知ることができた。その内容の一部を以下に報告する。

- 月曜日から木曜日まで24時間開館体制としている大学図書館がある。
- 図書館の中庭をカフェとして開放している。
- カフェが大変成功しており、昨年は約50万ドルの収入を得ている。大学図書館の大きな収入源となっている。
- 試験期間のみ24時間開館としている大学図書館がある。
- 館内飲食を可とし、館内のいたるところに分別ゴミ箱の設置している。
- 図書館内のカフェには飲食をとるという目的以外に、飲食をしながら会話をすることでお互いがリラックスでき有意義な話し合いに発展するという欧米の発想が根ざしている。
- ラーニングコモンズについては充実したICT機器やカフェや販売機といったハード面だけではなく、ライティングセンターやFDセンターやテクニカルレポートやレファレンスカウンターや留学支援といったソフト面での学生へのサポート体制が確立している。
- 館内はQuiet AreasやLimited Talking Areasといった住み分けが行われており、自由に選択可能な学習環境が提供されている。
(より詳細な情報は私立大学図書館協会ホームページの研修報告にて知ることができる。)

このような先行事例は大学教育の質の向上を見据えて、実現可能なところから段階的にサービスを展開するときの参考になると思われる。

6. 閉会式

開会式のスピーチ同様、閉会式のスピーチにおいて印象深く感じ、私がメモを取った内容を以下に紹

介する。

立教大学図書館 石川巧館長

“8月28日付けの朝日新聞によると48%の大学で定員割れを起こしているとのだが、これはとりもなおさず私立大学図書館協会の現状だと思われる。”

“私立大学図書館協会は総会で「生き残りをかけた戦略」というのを検討してきただろうか？大学の現状と館内でのサービスを切り離して論じてはいないだろうか？生き残りのために大学図書館が何をすることができるか？という点を考えていかなければならないと思う。”

慶應義塾大学メディアセンター 田村俊作所長

“図書館は人の総体である。人の本気度によって図書館は変わる。”

7. 当総会・研究大会に参加して

大学生に勉強させなければならないという今の文科省の政策の背景には、国の競争力の低下があり、それは翻ってこの国の未来が大学の教育力にかかっているということの現れだと考えられる。そうした

中で私たち大学図書館職員ができることは学生がモチベーションに突き動かされて図書館にやってきたとき、学生が満足する環境作りを整えておくことである。関西大学図書館は数年前より顧客満足の向上を最重要課題にしてきた。しかしながら、まだまだ十分ではないのが現状である。今回の私立大学図書館総会・研究大会に参加したことで各メディアから聞き及ぶ社会から要求されている大学図書館の姿と、すでにそういった要求に対応している先進的な大学図書館の事例を知り、それらをベンチマークに本学図書館の現状を客観視することができたと思う。この視点を忘れず、今後の業務に取り組んでいく所存である。

以上

参考文献

1. 中嶋嶺雄著「なぜ、国際教養大学で人材は育つのか」祥伝社 2010.12
2. 私立大学図書館協会ホームページ <http://www.jaspul.org/pre/kokusai-cilc/shiryu-old.html#haken> (参照 2012-9-15)

(かとう ひろゆき 図書館事務室)